セッションL「政治とおろかさについて――Nobutaka Otobe, *Stupidity in Politics*を読む」セッション事後報告

　本セッションでは、2020年に刊行されたNobutaka Otobe, *Stupidity in Politics*（Routledge）の書評セッションを行った。最初に世話人・司会の山本（立命館大学）からセッションの趣旨と本書の大まかな概要として、

①思考はおろかさから逃れられないこと。

②おろかさには思考に「複数性plurality」という共同的な次元を持ち込むこと。そのかぎりで、思考は際立って政治的でもあること。

③おろかさ論は現代デモクラシー論に重大な示唆をもつこと。

という三つのテーゼが紹介された。

最初の報告者である蛭田圭会員（オーフス大学）より、本書のポイントを手際良く整理したあと、アーレント研究の立場から本書の議論が吟味された。つまり乙部本によれば、アーレントはアイヒマンの無思考（thoughtlessness）を批判し、政治やおろかさとは切り離された（純粋な）思考の重要性を説いたとされる。しかし蛭田会員によれば、アーレントの思考は、政治とより密接にかかわるものであると指摘され、思考・政治・おろかさをめぐる乙部本の整理について問題提起された。今後の課題として、アーレントの「社会的なもの」とおろかさの問題、さらにアーレントとドゥルーズを対立的に捉える図式はどこまで妥当なものかとの問いが出された。

次に西川耕平氏（文京学院大学・非会員）から、報告をいただいた。西川氏はドゥルーズ研究の立場から、本書から①「おろかさは思考の内在的問題である」、②「おろかさは政治の内在的問題でもある」という二つのテーゼを引き出したうえで、①はドゥルーズのテクストから正当化できると擁護した。しかし②については、日常の平凡な人をもって「私」の思考に侵入する他者を特徴づける解釈に対していささかの疑問を呈した。さらに、乙部本の優れた点をドゥルーズの「謙虚さ」に着目したことに求め、ここから『差異と反復』を超えて、ドゥルーズの1980年代以降の著作へと本書の議論を展開する可能性を示唆した。

最後にエリス直美氏（UCLA博士課程・非会員）から報告をいただいた。まずエリス氏は、本書でクリシェと結び付けて論じられる「模倣」の概念に着目し、そこから古代から近代への移行を描くことを提起する。つまり、模倣の概念は古代から近代に至ってその意味を転換し、これをおろかさの問題系と重ねて議論する可能性が示された。さらに、ルソーの解釈に関しても、その「仮定による語り」に注目し、小林秀雄の政治的批評political critiqueとのつながりが示唆された。そして、戦後日本および小林秀雄の批評との関係から、おろかさの共同体が外部（過去や死者を含む）にどう応答できるのか、またcrisisをいかに説明不可能な断絶のままに、つまりは「おろかに」受け止めることができるのか、というおろかさの時間性をめぐる問題が提起された。

以上の三報告に対し、乙部延剛会員（大阪大学）からリプライがなされた。その後、フロアとの議論との討論に移った。参加者からは、おろかさと複数性の関係、おろかさとデモクラシーの関係、おろかさと全体主義の関係、そしておろかさを自覚する知の次元やミメーシスの解釈について質問があった。

なおフロアからのセッション参加者は30名程度だった。